櫻園通信 34. 平成 28 年 4 月
東京都健康長寿医療センター
養育院・渋沢記念コーナー
連絡先：老年学情報センター

草木搭 2

『草木塔』は、山川草木悉皆成仏を願う塔の総称ですが、『櫻園通信』のひとつのシリーズとして、敷地内の草木案内を書こうと思った経過については前号に記しました。

新病院設計の段階で、植栽に関してクライアントの意見を設計者が聴取する機会が持たれました。そのときは、終末期医療に関わる場合もあるから、椿のような首がポロリと落ちる椿はやめようかとか、匂いの強いものは避けようとか言う意見はありましたが、みんな植物のことはよく解らず、専門の植木屋さんにお任せという様子だったように思います。

しかし、出来てから幾つかのことに気づきました。屋上庭園にオレンジ色の花が咲くボケが植えてあり、植物名を書いた札に「ボケ」と書いてありました。認知症患者の診療にかかわることが多く、ボケの花盛りも困りますねという話をしていたら、後日、「ボケ」の名札が「木瓜」に書き換えられていました。認知症でなくても読めない人が続出しそうです。

ボケ(木瓜)

完成した庭の、名札をつけた植物を見て驚いた。カタカナ名の植物が多く、人の名前も覚えつらくなる老年期に、全くアウトである。「ラミウム」、「アベリア」、「アガパンサス」、「ガウラ」、「アスチルベ」「リグラリア」、おまけに和名で呼ばれているものもカタカナで書いてあり、少しは詳しいつもりの私にも、何がなんだかよく解らない。認知症などの心理療法として行われる「回想法」では、タンポポやスミレ、レンゲを見て、幼い日々を思い起こし・・・そんな配慮は設計者や植木屋さんにはないようです。この号では、春に咲く英語そのままのカタカナ名の植物を集めてみます。

④ ラミウム（蔓踊子草）

センター正面から入ってすぐの所に、地を這う銀白色の斑入りの葉があります。春には踊子草のような形の黄色い花を咲かせますが、「ルミナリア」と書いてあります。

もともとヨーロッパからアジアに分布しているシソ科オドリコソウ属の常緑多年草で、林内の半日陰に生え、高さ１０～２０センチになります。匍匐枝を多く出して広がります。葉は緑ですが、銀白色やクリーム色の斑入り品種がたくさんあり、葉を楽しむ目的でグランドカバーにも用いられます。春から夏にかけて、ピンクや黄、白色などの花を咲かせます。当院に植えられているのは、黄色の花を咲かせるラミウム・ガリオドブロンという種類です。我が国に自生するオドリコソウ（踊子草）の仲間であり、「蔓踊子草」という和名があります。

現在日本固有の踊子草はたいへん少なくなり、まれにしか見られません。替わりにもともとヨーロッパ原産ですが、明治の中頃日本に帰化したヒメオドリコソウが大いに繁茂しています。町や近郊でどこにでも見られます。野原に普通に見られるホトケノザ（仏の座）とも近縁ですが葉の形が異なります。なお、七草粥にするホトケノザは、コオニタビラコ（小鬼田平子）という黄色い花の咲く別の植物です。

オドリコソウ

ヒメオドリコソウ

ホトケノザ

⑤アベリア（花園衝羽根空木）

入り口のグランドカバーに、斑なしと斑入りの小さい葉が多数みられます（タイトル背景）、春になると白かピンクの小さなロート状の花をつけます。これがアベリアで、和名は「花園衝羽空木」といいます。

本来、アベリアとはツクバネウツギ属のラテン名です。山で見る野生のツクバネウツギは、高さ-1-2 メートルの灌木で、2 センチくらいの釣り鐘型の薄クリーム色の花がペアで咲きます。

一方、街のあちこちに植えられている園芸品種のアベリアは、中国原産の Abelia chinensis（タイワンツクバネウツギの母種）と Abelia uniflora の交雑といわれています。垣根、街路などに大量に用いられ、いまや町のどこででも見られます。春～秋のかなり長期に渡って、鐘形の 1 センチ未満の小さい花を多数咲かせます。花の香りは強いようです。関東以西では真夏の酷暑の時期に花をつける在来植物が少ないため、花には多様なハチやチョウが蜜を吸いに集まります。

ハナゾノツクバネウツギ

ツクバネウツギ

⑥アガパンサス（ムラサキクンシラン　紫君子蘭）

梅雨時期を中心として、光沢のある細長い葉の中心から長く延びる花茎の先端に数十輪の花を放射状に咲かせます。

君子蘭に姿が似て紫色の花を咲かせるという意味の和名でしょうが、縁もゆかりもない別属の植物で、あまり似ているとも思えません。アフリカ原産の植物ですが、今日 300 種以上の園芸品種があり、開花時期や草丈などのバラティーに富んでいます。梅雨の季節の風物詩になりつつあり、紫陽花人気に迫っているかのようです。

君子蘭